



新日本フィルハーモニー交響楽団
2022/2023シーズン

2023

1

January

KEN TAKASEKI



MICHIYOSHI INOUE



1

2022/2023 Season
January

新日本フィルハーモニー交響楽団 1月演奏会

Contents

すみだクラシックへの扉 #12 小室敬幸	1
トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #646	7
ミュージカルオペラ『A Way from Surrender ~降福からの道~』op. 4	
あらすじ	8
キャスト・スタッフ	10
プログラム・ノート 渋谷陽子	15
楽員ストーリーズ ③ 深谷まり (第2ヴァイオリン)	19
NJP from Inside	20
2023/2024シーズン 記者会見レポート	23
2023/2024シーズン 定期演奏会プログラム	24
NJP 3月公演 片桐卓也の《鑑賞のツボ》	29
NJP50周年誌…こぼれ話 齋藤 克	31
室内楽シリーズ	33
「パトロネージュ・システム」のご案内	40

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈ご来場のお客様へ〉

下記ご協力下さいますようお願いいたします。



1.13 [金] 14 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第12回
2023年1月13日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
1月14日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

●ブラームス (1833-97)

Johannes Brahms

ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 op. 83 *

Piano Concerto No. 2 in B-Flat major, op. 83 *

約50分

- I. Allegro non troppo
- II. Allegro appassionato
- III. Andante
- IV. Allegretto grazioso

—— 休憩20分 ——

交響曲第3番 へ長調 op. 90

Symphony No. 3 in F major, op. 90

約40分

- I. Allegro con brio
- II. Andante
- III. Poco allegretto
- IV. Allegro

[指揮] 高関 健

Ken Takaseki, Conductor

[ピアノ] ネルソン・ゲルナー *

Nelson Goerner, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

れることで——自作自演では最も素晴らしいと称された!——緩徐楽章の魅力がより際立つのだろう。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章は、ホルンとピアノが交互に奏する第1主題ではじまる自由な協奏ソナタ形式。続く木管楽器、そしてピアノ独奏が新たな旋律を提示していくようにも聴こえるが、実は第1主題から派生したもの。少ない素材から多様な音楽を生み出していくのがブラームスの流儀なのだ。長調が主となる第1主題部と移行部、短調で憂いのある第2主題部と小結尾部を、変奏を伴いながら2周。その後、ホルンが短調で第1主題を吹くところから展開部となる。

第2楽章は前述した通り、スケルツォ。ソナタ形式と三部形式を合成した特殊な形式でつくられている。ピアノによる冒頭の第1主題も、弦楽器が単旋律で提示する第2主題も、第1楽章の第1主題から派生したものだ。展開部の終わりで第2主題が総奏で再現されると、長調の中間部(トリオ)が挿入され、その後改めて第1主題の再現が続く。

第3楽章は、三部形式による緩徐楽章。冒頭で独奏チェロが歌い出す主題は、第1楽章の第2主題から派生したもので、ピアノ独奏ではじまる中間部(実質的な展開部)でもこの旋律が主に変奏されていく。終盤、調号がシャープ6つとなる嬰へ長調で主題が回帰するが、これは偽物。その直後に改めて主調である変ロ長調で再現がなされる。

第4楽章は、ロンド風の提示部をもつソナタ形式。愉悦的な第1主題と哀愁漂う第2主題はどちらも、刺繍音(∨もしくは∧のような音の動き)が核となっているが、この要素も第1楽章の第1主題からとられている。展開部と再現部を経て、ピアノ独奏がテンポアップするところから結尾となって終止線まで駆け抜けてゆく。

[楽器編成] ピアノ独奏、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ ブラームス：交響曲第3番 へ長調 op. 90

50歳の夏に作曲 ▶

ピアノ協奏曲第2番の完成から2年後。1883年の夏の間に、集中的に書かれたのがこの交響曲である。後年、ブラームスは作曲のスケッチや手紙などを破棄しているため、創作の経緯が分からない楽曲がいくつも存在しているが本作もそのひとつだ。残された資料から考えられる説のひとつは、1882年に出会った自らよりも24歳若いアルト歌手との恋愛

や破局が音楽に反映されているのではないかというもの。

長調のなかの陰り ▶

もうひとつはブラームスの親友で、彼の伝記を著したマックス・カルベックが書き残したもので、ブラームスの座右の銘「自由にしかし喜ばしく Frei aber froh」(ヨアヒムの座右の銘「自由にしかし孤独に Frei aber einsam」のもじり)の各単語から取られた「F(ファ)／A(ラ) Be(独語のb)／F(ファ)」が交響曲冒頭で木管楽器が奏する音形になっているという説である。へ短調であるこの音形がそのような意味を持っているのか断定は出来ないが、交響曲の主調であるへ長調のなかに混在することで陰りのある音楽になっているのは事実だ。

長調から短調へという引力は楽章構成にも反映されており、外側は第1楽章(へ長調)→第4楽章(へ短調)、内側は第2楽章(ハ長調)→第3楽章(ハ短調)という構造になっている。それ故に聴覚上も第4楽章へ向かうほど秋が深まってゆくかのような印象を受けるのである。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章はソナタ形式で、前述した「ファ／ラb／ファ」という上行音形が至るところに登場する。弦楽器によるダイナミックな第1主題に対し、第2主題はクラリネットが優しく歌い出す。展開部や再現部は最初こそドラマティックにはじまるが、内向的な音楽へと徐々に姿を変えていくのが特徴といえる。

第2楽章は、ソナタ形式による緩徐楽章。ハ長調らしい素朴な雰囲気だが、陰りのある音楽へと移ろっていくのが儂げで美しい。第2主題は、クラリネットとファゴットが奏する憂いのある旋律だ。

第3楽章は、三部形式。本来なら舞曲楽章となるところでテンポの指定も「ポコ・アレグレット」だが、事実上は2つ目の緩徐楽章。ハ短調となり、最初から悲しみが滲み出ている。

第4楽章は、へ短調ではじまるソナタ形式。か弱く提示された第1主題が少し後に、ダイナミックに再提示されるという流れは前作、交響曲第2番のフィナーレを踏襲したものだが、その後の展開は大きく異なっている。ホルンが吹きはじめる明るく活力を感じさせる第2主題も絡み合いながら、第1楽章と同様に短調と長調が拮抗していくことでドラマを生み出していき、最終的になんとか主調であるへ長調に回帰してゆくの。最後は第1楽章の第1主題を再現することで、穏やかな結末を迎える。

[楽器編成] フルード2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。



©K.Miura

高関 健 [指揮] Ken Takaseki, Conductor

サンクトペテルブルグ・フィル定期演奏会で聴衆や楽員から大絶賛を受けるなど海外への客演も多く、世界的ソリストや作曲家、特にマルタ・アルゲリッチからは3回の共演を通じて絶大な信頼を得る、緻密なスコア分析からスケールの大きな音楽を作り出す名匠。オペラでも好評を博し、大阪カレッジオペラでのプリテン『ピーター・グライムズ』、最近では新国立劇場で團伊玖磨『夕鶴』、ストラヴィンスキー『夜鳴きうぐいす』、チャイコフスキー『イオランタ』、2019年にはウラジオストクとサンクトペテルブルグでも『夕鶴』を指揮、作品の魅力を存分に伝えて高い評価を得ている。国内主要オーケストラで重職を歴任し、現在東京シティ・フィル常任指揮者、仙台フィルレジデント・コンダクター（2023年4月から常任指揮者）、富士山静岡交響楽団首席指揮者、東京藝大指揮科教授。NHK等の番組にも定期的に出演するなど幅広い活躍を続けている。1977年カラヤン指揮者コンクールジャパン、1984年ハンス・スワロフスキー国際指揮者コンクール優勝。第4回渡邊暁雄音楽基金音楽賞、第10回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第50回サントリー音楽賞を受賞。 twitter.com/KenTakaseki



©Marco Borggreve

ネルソン・ゲルナー [ピアノ] Nelson Goerner, Piano

現代を代表するピアニストとして活躍するゲルナーのピアノは、最高に芸術的であり、詩的で、驚くべき音楽性を誇る。その爽快で確信に満ちた演奏は、世界中の聴衆を惹きつけている。2021/22シーズンは、ウィグモアホール、シャンゼリゼ劇場、ヴィクトリアホールなど、世界各地の主要なホールに登場する。これまでアシュケナージ、N.ヤルヴィ、ノット、ルイージ、サロネラの指揮のもと、ロンドン・フィル、バリ管、N響などと共演を重ねてきた。ザルツブルク、ラ・ロック=ダンテロン、ヴェルビエ、BBCプロムスなどの国際音楽祭にも度々招かれている。室内楽ではアルゲリッチ、イッサーリスらと定期的に共演している。1969年、アルゼンチンのサンペドロ生まれ。ブエノスアイレス高等音楽院で学び、86年にブエノスアイレスで開かれたフランツ・リスト国際コンクールで第1位を受賞。アルゲリッチから奨学金を授けられジュネーヴ音楽院のマリア・ティーポのもとで研鑽を積んだ。90年にはジュネーヴ国際コンクールで第1位に輝く。現在、ジュネーヴ高等音楽院の教授として後進の指導にも励んでいる。2022年リリースしたCDアルバム『ALBÉNIZ: IBERIA』(Alpha Classics)が、仏クラシカ誌の2022CHOC賞に輝くなど、録音でも高い評価を得ている。

「演奏はあくまでも、名人芸を蔑む作曲家のものであり、完成されたピアニストのレベルではない。ソロ・パートにちりばめられた危険極まりない跳躍音型は、正確さとは無関係に弾かれ、間違っただけは両手からこぼれんばかり。これらは決して大きさに言っているのではない。タッチは堅くなり、力のコントロールができない。だから遅い楽章が一番で、ブラームスは自分の弱みに邪魔されることもなく、ピロードのような肌触りを作り上げていた。しかし私は、その威容といい解釈といい、あれほどすごい協奏曲の演奏というものを聴いたことがない」(『ブラームス回想録集 第三巻』天崎浩二・関根裕子 共訳)

ヨハネス・ブラームス(1833~97)の熱心な信奉者だったイギリスの作曲家チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォード(1852~1924)は、ハンブルクで聴いたブラームス自身の演奏するピアノ協奏曲第2番を振り返って、こう書き残した。貶しているようで、最後にはこれ以上ないほどに大きな賛辞を贈っているのが面白い。シューマン夫妻の娘オイゲーニエも「主題は大胆に強調して、驚くほど自由なリズムで演奏する一方、伴奏に回れば輪郭を描くだけ。そのため聴き手は光と影を強く感じる」(前掲書)と評していることから、ブラームスは創作姿勢こそ端正かつ慎重だったが、ピアノではコントラスト強めの大胆な演奏をしていたようだ。

■ ブラームス：ピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 op. 83

作曲の経緯 ▶ 創作の試みから完成まで20年以上を要した交響曲第1番が遂に初演されたのが1876年。その2年後に本作のスケッチが開始された時、ブラームスは親友ヨーゼフ・ヨアヒムから助言をもらいながらヴァイオリン協奏曲を作曲している最中だった。定形である3楽章構成(急一緩一急)ではなく、第2楽章としてスケルツォを挟み込んだ4楽章構成でヴァイオリン協奏曲は構想され、実際に作曲も進められていたという。だが途中で3楽章構成に軌道修正し、代わりに4楽章構成というアイデアは1881年に完成したピアノ協奏曲第2番へと引き継がれた。こうした経緯から似たような旋律や展開も多く、2つの協奏曲は姉妹作といえる。

スケルツォを伴う4楽章構成 ▶ 協奏曲としては(緩徐楽章の中間部として登場する場合を除いて)珍しいスケルツォだが、やはり初演後はたびたび批判されたり疑問が投げかけられたりしてきた。だが二短調のスケルツォを省いてしてしまうと、残り3つの楽章全てが変ロ長調になってしまうし、激しいスケルツォが置か